

稲城市長賞

誰かのために

稲城市立稲城第四中学校

三学年 川村 美里

昨年、能登半島地震のニュースを見たとき、私は胸が締めつけられるような気持ちになった。倒壊した家、壊れた道路、避難所で過ごす人たちの姿。不安な日々を送る被災地の人たちの様子をテレビで見るたびに、何かできることはないのだろうかと考えた。

そんな中、「税金が使われている」という言葉を耳にした。道路の復旧、避難所の設置、食料や水の配布、仮設住宅の建設など、被災地で行われている支援の多くは、私たちによって納められている税金で行われていることを知った。

今まで私は、税金は「大人が払うお金」、「将来関係あるもの」くらいにしか思っていなかった。でも、能登半島地震の支援の様子を見て、税金は困っている人を助けるための大切なお金だと実感した。

また、災害だけでなく、普段の生活でも税金は欠かせないことも知った。私が通う学校の校舎や教科書、先生たちの給料も税金でまかなわれている。誰かが納めてくれた税金が私たちの教育や安全な暮らしを支えてくれていると思うと、「当たり前」ではないことに気づいた。

災害はいつ、どこで起きるか分からない。もし、今住んでいる町で同じような地震が起きたり、友達や家族が困っていたとしたら、誰かの納めた税金で支援を受けられることは、

とてもありがたいことだと思う。

税金は「みんなで支え合うためのお金」だと、私は思う。誰かが困ったときには助け合い、安心して暮らせる社会をつくるために使われている。その仕組みがあるからこそ、私たちはこうして安全に、快適に生きることができている。

私はまだ税金を納める立場ではないけれど、将来社会の一員になったとき、自分もその仕組みを支える側になりたい。これから生きていく中で、税金のありがたみを感じるときはたくさんあるだろう。また、税金に対して、否定的な考えをもってしまうこともあるだろう。例えば、お給料をもらったときに、所得税によつて大幅に引かれる。なにかものを買ったときには、消費税として、十パーセント引かれる。でもそんなときに、「この行動は、誰かのためになる」ということを思い出してみたい。

誰かのために税金を納めることは、ともに助け合って生きていくこの社会を、守ることにつながっていくと思う。

東京納税貯蓄組合総連合会会長賞

私達で森林を守る

稲城市立稲城第二中学校

三学年 佐藤 恵南

私は税の作文を書くにあたり、様々な税を調べてみることにしました。すると森林環境税という初めて見た名前を目にしました。気になって調べてみると二〇二四年から始まったまだ新しい税だということを知りました。

まず、日本の国土の約七割をしめる森林は様々な利点を私達にもたらしめます。例えば、土砂災害を防止することが出来たり、水を貯留し河川の水量を安定させたりすることを出来る機能をもっています。最も大きな利点は、植物の光合成による温室効果ガスの軽減です。温室効果ガスは、私達を今悩ませる地球温暖化の大きな原因となっています。それを少なくすることが森林には出来ます。森林がないと地球温暖化を加速させることになるのです。そんな森林を守るために私達は、森林を手入れしなければなりません。しかし現在、森林の手入れに携わる林業の担い手は年々減っていき、森林を整備する人達の年齢も徐々に高くなっていきます。そのため森林環境税は、林業の担い手を育成するための研修、技術習得のための講座開催などの人材の育成や作業員の安全防御服の購入補助などにも使われています。特に林業の担い手不足を解消するために、森林環境税は役立っています。

他には、公共施設の木質化による木材利用の推進として公共建築物の木造、植樹などが

行われています。茨城県神栖市では、森林環境税を使い市民等を対象にした植樹イベントが行われていたり、東京都江戸川区の中学校図書館では、内装木質化が行われていたり森林環境税は、木材利用や木材利用の普及などにも使われています。森林を守るために地域によって様々な工夫をされ使われているのです。

私達は、豊かな自然によって日々の生活を豊かにおくることが出来ています。そんな自然を守るために森林環境税があるのです。私達が支払っている税金で森林を守ることが出来るのです。森林環境税が使われるのは森林に対してですが、その他にも色々な税金が色々な事に使われています。支払っている税金がなにに使われているのかを知ることが納税する上で一番大事なことはないかと私は思います。税に対してマイナスなイメージを持っている人も税金が一体どう使われているのかを知ることが出来ると思います。

南多摩納税貯蓄組合連合会会長賞

税金でつくるきれいな社会

稲城市立稲城第二中学校

三学年 荻野 友吾

最近、僕の通う校舎がきれいになった。壁の黒ずみはなくなり、登下校するたび、今まで以上に清々しい気分になることができるようになったのだ。校舎の改装が税金によって賄われていることを先生に教えてもらっていた僕は、税金を使った社会をきれいにする活動に興味を持ち、調べてみることにした。一番最初に目に留まったのは、やはり学校や市役所、公園など公共施設の建設や改修だった。僕たちが普段何気なく使っていた施設も、税金によってつくられていたのだ。

そして、予想外だったのがゴミ処理だ。道路に落ちたゴミを片付けてくれたり、朝に様々なゴミを回収してくれる人たちの活動は、税金で成り立っていたのだ。それらの活動が個人事業だと思っていた僕は、これにとっても驚いた。

それから数日後、習い事に向かおうとしていると、ゴミ収集車を見かけた。なんとなく様子を見てみると、ゴミ収集員の人々が笑っているように見えた。汚いゴミを片付けることが、いやだと感じていないことを、僕は疑問に思った。

それからまた数日後、今度はトイレをそうじをしている人を見かけた。そこに通りかかったのは三人の小学生。

「おはようございます！」

と大きな声で挨拶する三人に、清掃員の方

は「おはようございます。」と、優しく返す様子を見て、僕は思った。町をきれいにしている人々は、片付けることを誇りに思っているのではないかと。だとしたら、ゴミ収集員の方やトイレ清掃員の方が楽しそうに掃除していたのにも理由が付くし、町がきれいな状態に保たれていることも分かる。

これらの数日の出来事から、町のきれいさは片付けてくれている人の誇りによって保たれていると僕は考える。また、清掃員でない以上、清掃員の方のためになる行動が、大事なのではないだろうか。例えば、ゴミを分別したり、会った時に感謝を伝えるなどだ。きれいな社会をつくるには、税金だけでなく、行動することが大事なのだ。

南多摩納税貯蓄組合連合会優秀賞

税の監視

稲城市立稲城第四中学校

三学年 石田 有

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

これは、毎年四月に配られる教科書の裏表紙に印刷されている言葉です。どの教科書にも同じ言葉が印刷されていて、初めて「税金」という言葉を意識したのはそこからでした。

令和の今、私たちは増税の時代を生きているそうです。「そうです」と書いたのは、将来的には消費税が上がるかも、さらに増税することもあり得ると聞かされ続けているからです。実際、サラリーマンの父が一生懸命働いたお給料の給料明細を見ると、たくさん税金が取られていて、家計を支える母の負担は大きくなっています。

しかし、その「取られている」と感じている税金は暮らしを支える重要なお金で、とても身近な存在です。例えば、税金によって学校が運営され、教科書は無償で配られています。稲城市民は十八歳まで二百円で病院にかかることができ、病院で処方されたお薬は無料です。でも、支払っている二百円以外の病院代やお薬代は税金を使って支払ってもらっているのです。他にも歩きやすい道路の整備、小さいころから何度も行った公園の遊具、たくさん知識を広げてくれる図書館の本にも税金が使われています。つまり今の自分の生活は誰かが収めた税金によって成り立っている

のです。

ですが、その大切な税金は本当に正しく使われているのでしょうか。新聞やテレビのニュースでは税金の無駄遣いなどの話が流れてきて、一部の政治家による税金のずさんな使い込みや、使い道があいまいな国の予算には強い疑問を感じます。国は税金を「集める」とばかりに注目して「使い方」をおろそかにしているのではないのでしょうか。

では、中学生には何ができるのでしょいか。私は二つのことを考えました。

一つ目は、なぜ増税しているのか社会の仕組みや税金について学ぶことです。社会の授業で先生が話したことを深く考えたり、ニュースを見て分からないことを調べたりするだけでも大きな一歩だと思います。

二つ目は、家族と税金やお金の話をすることです。例えば、「どうしてアメリカに防衛費を支払っているのか」という税金の話から「どうして総合体育館を利用をするのにはお金がかかるのに、学校の体育館を使うのにお金がかからないのか」という身近な疑問を話すことで、家族の中での意識も高まります。そして税金の使い道を知るきっかけになります。

税金は、私たちの暮らしの土台です。土台が崩れないように税金は適切に使わなければなりません。増税の時代を仕方なく生きる私たちが、今できることにしっかり取り組むことが必要です。また、自らが税金を取り締まる検察庁の仕事に就き、不平等な税金の仕組みや増税問題などを根本から解決したいです。

南多摩納税貯蓄組合連合会優秀賞

健康を支える税金

稲城市立稲城第五中学校

三学年 迫 奏羽

健康でありたい。誰もがそう願うでしょう。しかし、現実はその甘くなく、必ずしも一、二回、またはそれ以上に薬や病院にお世話になるということが、年齢を増すごとに、身に染みて感じます。

私は昔から病弱で、家の近くの病院によくお世話になっています。毎回薬を買ってもらうことが申し訳なく、先日母に「いつも買わせてごめんね。」と言いました。すると母は「娘なんだから気にしないでいいんだよ。それに結構市が負担してるから本当に大丈夫。」と言いました。私はどれくらい負担してるのかなと思い、ネットで調べたところ、自分が想像していたよりも多く市が負担していたことを知り、税金のありがたみを感じました。

私の兄は高校での部活動中に熱中症で倒れ、救急車に運ばれたことがあります。学校から急に連絡があり、家族全員パニック状態になりました。しかし、そんな私たちの心配も半日で終わり、翌日には兄が普通に帰ってきました。あまりにも普通に笑っている兄に「あんまりやばくなかったんだね。」と言うと、兄からとんでもない衝撃発言が出ました。「いや、処置が遅れたり、救急車で寝たりしたら、死んでたらしい。」。私はその話を詳しく聞きました。なんでも、顧問の先生が瞬時に救急車を呼んでくれたり、救急救命士の人達が救急車の中でずっと大声で呼びかけてくれたり

したことでやっと繋がれた命だと。私は兄を助けてくれた全ての人に心の中で感謝しました。それと同時に、救命救命士という仕事がとても素敵だと思い、調べてみました。すると、救急車や救命救急士の給料は税金から賄われていることが分かりました。いつの日か、アメリカだと救急車を呼ぶのには約十万円かかるということを知り合いのおじさんに聞きました。もし日本がアメリカと同じ制度だったら、兄の顧問の先生は救急車を呼ぶのをためらっていたかもしれません。しかも、そうなると処置までの時間が空きすぎてしまい、兄は助からなかったかもしれません。処置までの時間の長さで死は直結します。毎年多くの方が救急車で運ばれ、生命を助け出されます。それを容易にしているのが税金だと考えると、税金には感謝してもしきれないです。兄を生かしてくれてありがとう。

こう出来事を書きつらねると、いかに税金が私たちを支えてくれるかがよく分かります。税金が負担してくれたぶんを自分たちで負担しなさいと言われたらどれだけ不自由になるのか。想像するだけで血の気が引きます。だからこそ、私は税金にとっても感謝しています。私も大人になったらしっかりと税金を納めて、誰かの平和を守るために、少しでも役立ちたいです。

南多摩納税貯蓄組合連合会優秀賞

物価高の中安心して買い物をするために

稲城市立稲城第六中学校

三学年 境 奏太

今年の7月衆議院選挙の投開票が行われた。大きな焦点の一つとして、各党が物価高対策を公約として掲げていた。実際に生活している人も、米が備蓄米になったり、お菓子の袋を開けたら中身が少なくてびっくりすることがある。一生懸命勉強していたらすぐルーズリーフがなくなってしまい、それも枚数が減ったようだ。物価高をひしひしと感じている。

用してあげている。その一回ずつに少額課税し「塵も積もれば山となる」方式で税を徴収し、情報弱者の人、つまりは現金で購入する人の消費税を減額することに、それを使っはどうだろうか。

大好きな祖父が無駄遣いをするのを見たことがない。今まで真面目に生きてきて年金で暮らしている祖父が、お金のことを心配しているのは本当に変だと思う。祖父のように真面目に生活している人が情報弱者というだけで苦労する日本ではなく、デジタルに関わり利益を挙げている会社から税を徴収することで、皆が安心して買い物ができる日本になってもらいたい。

そうした苦しい生活の中で母は、「今日はポイント還元が多い日だから、買い物を色々してくる」「クーポンがあるからこれで買って」などと言う事が多くなった。一方で近くに住む祖父はいつも現金で買い物をしており、「〴〵が高くて買えないんだよな」と言っている。キャッシュレス決済のポイント還元やクーポンを使って物価高に対応しようとしている人がいる一方で、負担を減らす方法を知らない、またやり方が分からない情報弱者の人の負担を減らす方法はないものか。

現在、キャッシュレス決済は急速に進んでおり、キャッシュレスの会社は法人税(23.2%)、消費税(加盟店から受け取る手数料が課税対象)、地方税(法人住民税や事業税)を支払っている。現在は多くの人が自動販売機で買うジュース一本から高価なものまでを気軽にキャッシュレス決済で購入している。つまりは一日に何回もそのキャッシュレスの会社を利

南多摩納税貯蓄組合連合会優秀賞

未来の税金

稲城市立稲城第六中学校

三学年 松井 律仁

近所のスーパーに行った時、レジがセルフレジになっていることに気がついた。最近のスーパーだけでなく、工場やコンビニエンスストアなどでも、いろいろな場所でAIやロボットが活躍している。そんな中で私が疑問に思ったのは、AIやロボットが人間の代わりに働くようになると、税金はどうなるのかということだ。

今の社会では、税金は人々が働いて得た給料や、物を買った時のお金に対してかかっている。しかし、AIやロボットが人間の代わりに働くと、今まで労働者が払ってきた所得税が減少するため、日本の税収が減り、財政難に陥ってしまう。そこで、解決策を調べていくうちに、「ロボット税」という新しい税金が現在議論されていると知った。

ロボット税とは、労働者が払うはずだった所得税を、AI・ロボットの所有者である企業が代わりに払うという考え方だそう。今回はロボット税のメリット・デメリットについて考えていきたい。

まず、ロボット税を導入するメリットは、労働者の所得税が減少しても、政府が一定の税収を確保し続けることができるということだ。このことより、税金の不足を防ぐことができ、インフラ整備・治安維持・教育・福祉など、私たちが生活するために社会に必要なことを保つことができる。また、ロボット税は、

職業のロボット化により、職を失った人々への失業手当としても活用できるので、失業者の支援にもつながる。

しかし、ロボット税にはデメリットも存在する。一番大きなデメリットは、ロボット税を導入することは失業者を減らすための直接的な解決策にはならないということだ。なぜなら、そもそもロボット税を導入することは、AI・ロボットが人間の仕事を代わりにするようになることが大前提であるからだ。これではAI・ロボットに仕事を奪われて失業者が生まれることを防ぐことはできない。次に、AI・ロボットには種類が多く、何をロボットとみなすかが曖昧で、課税対象を定義することが難しいことが挙げられる。

このように、ロボット税にはメリットもデメリットもあり、技術的な面だけでなく、政治や社会にも深く関係するため、決して単純な問題ではない。だからこそ、ロボット税を導入するべきかどうかは慎重に検討される必要があると思う。税金とロボット。一見すると、全く関係のない二つだが色々なところでロボットが活用されている今、もはや切っても切れない関係になりつつある。私達が大人になって働く頃には、今よりももっとAI・ロボットが進化し、社会に浸透しているだろう、そんな中でAI・ロボットと共存しながら、日本をより良い環境にしていくためにもこの「未来の税金」について私たちも考えることが大切だ。

東京都八王子都税事務所長賞

税金でつなぐ未来への扉

稲城市立稲城第二中学校

三学年 品川 紗希

私は、博物館や美術館が大好きだ。展示品の数々は勿論、その建物自体、その空間自体がまとう歴史や人々の思いを感じるのが好きだ。過去と現在、そして未来を繋いでくれるこの空間はまさに未来への宝箱といえる。

ところが二〇二三年、国立科学博物館がクラウドファンディングをしていると話題になった。目標額は一億円。それを知った私は、「国立と名の付く博物館が、なぜ寄付金を求めるのだろうか。税金で賄われないのか。」と疑問をもった。調べてみると、税金の使い

道は、医療や福祉、災害復興など数えきれないほど多く、文化や学問に使えるお金は減っているのだと分かった。さらに、全国の博物館なども同じように苦しんでいるのだそう

だ。このことから私は、税金と寄付の役割についてこのように考えた。税金には、みんなで少しずつ出し合うことで施設や地球の宝を守る、そんな「必要最低限を守り続ける力」がある一方で、寄付には「もつとを叶える力」があるのだと。そして国立科学博物館の件では、その必要最低限を守り切れなくなったが故に、寄付が必要となったのだ。

これが、文化や学問に使える税金が減ったことを原因だとするならば、これからの私達は、今の生活の必要最低限を守りながら文化や学問に使う税金を増やすことを考えるべきだろう。そしてそのためには、税金の無駄遣

いを減らすことが必要であると私は考える。

例えば、一時期問題となった、救急車をタクシー代わりに呼ぶ行為。これにより、一回の出動につき四万円以上の税金が無駄になるといわれている。また、ごみの分別を粗末にしたり、油をそのまま流したりすることも処理費用が増えて結局は税金の無駄遣いにつながる。このような税金の無駄遣いにつながる行動を減らしていくひとりひとりの小さな心掛けが、必要なところに税金を届けられるようになるかどうかを左右しているのだ。

さらに、能登半島地震の復興やこれまでの自然災害の復興もまだ終わってはいない。より一層、必要なところに税金を届けるためにも、どこにどれだけ必要なのか、無駄遣いをしていないか、私達自身も今一度考える必要がある。少子高齢化が進む今、税金のことを考えるのは大人だけではない。未来を担う私達学生こそ、早くから理解することが大切だ。見えない税金、これまで見てこなかった税金を自分自身の目で見つめ直すこと、それがよりよい未来を築き、社会と文化を守るための第一歩になるのだ。

だから私は願う、これからも、大好きな博物館や美術館の扉が開かれ続けてほしいと。税金という見えないチケットで支えられたこの扉を、未来の人々が当たり前のようにくぐれるように。必要最低限が守られるように。税金について考えることは、過去と現在、そして未来を繋げ、守ることと同じなのだ。

東京税理士会日野支部長賞

税の使い道と税の提案

稲城市立稲城第二中学校

三学年 小俣 凌我

僕は服を買うために、お小遣い三万円を貯めて店に向かった。しかし、値札を見て驚いた。二万三千元。消費税だ。その三千円を貯めるのに、どれだけ我慢したことか。僕は税金に悔しさと不満を感じた。

その時、「税金は何に使われているのか」と疑問がわいた。母に聞くと、姉が通う私立中学の学費は年間百万円以上かかるという。僕は公立中学に通っているが、学費はほとんどかからない。つまり、僕が学校に通えるのは、税金で支えられているからだを知った。そう考えると、もし税金がなかったら、学校に行けるのは一部の裕福な人だけになってしまうかもしれない。勉強する権利が、お金のあるなしで決まる社会は、とても不公平だ。僕が楽しい学校生活を送れているのは、税金のおかげなのだ。

この経験を通して、税金は悪いものではなく、その使い道が大切だということを考えるようになった。必要な人のために使われる税金なら、我慢できる。税金のおかげで、僕たちは学び、未来をつくることができるのだ。

その時に、最近ニュースで「独身税」という言葉を耳にした。これは、子育てにはお金が必要だから、子育てをしていない人も支えてほしいという仕組みらしい。僕はこの制度に納得がいかなかった。

世の中には、さまざまな理由で独身だった

り、子どもがいない人がいるはずだ。その事情を無視して「独身だから」と特別に負担を強いるように感じる。結婚や子どもを持つかどうかは、自由なはずだ。もちろん、少子化は深刻な問題だ。けれど、「独身税があるから結婚して子どもを産もう」とはならない。このような負のイメージで税金を集めるのではなく、もっと前向きに子育てを応援する仕組みを作るべきだと僕は思う。

そこで、お金はどうやって集めるのか。僕は「勝ち組税」という新しい税金を提案したい。それは、生活必需品以外にお金を使える人たちに、高級品を買うとき、旅行に行くとかなどに、少し多く税金をかけるのだ。

ただし、「勝ち組税」を導入すると、一生懸命働いている人が損をしているように感じるかもしれない。そこで、税金をたくさん納めた人には感謝の気持ちを込めて、公表したり、広告で紹介したりして、社会全体で「ありがとう」と伝える仕組みをつくる。そうすれば、税金を納めることが誇らしいことになると思う。

税金は、僕たちの生活を支える大切なものだ。だからこそ、不公平で誰かを傷つける税金ではなく、みんなが納得できて、社会を良くする税金であってほしい。

将来、僕は税金を納める立場になる。そのとき、この考えを忘れないようにしたい。税金の使い方を考えることは、社会の未来を考えることだと、僕は強く感じている。